

Q-Uを用いた児童理解及び生徒指導

総合教育高度化プログラム・学校構想サブプログラム 22AE002

高橋 航太

【指導教員】萩生田 伸子 堀田 香織 中井 大介

【キーワード】学級づくり Q-U 学級集団 児童理解 生徒指導

1. 研究の目的と問題の所在

今日の学校教育の課題として、いじめの認知件数や不登校児童生徒数が依然として高いことがあげられている。令和4年10月27日に文部科学省初等中等教育局児童生徒課によって出された「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の調査結果では、全国の国公私立の学校の諸問題の状況を調査・分析している。令和3年度におけるいじめ及び不登校の推移とその状況では、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は615351件であり、前年度に比べ98188件（19、0%）増加している。また、小・中学校における不登校児童生徒数は244940人（前年度196127人）であり、不登校児童生徒数は9年連続で増加し、過去最多となっている。いじめの状況において、小・中学校及び特別支援学校では、「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が最も割合が高く、続いて「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」割合が高い。また、不登校の状況についてその要因として、いじめ、いじめを除く関係をめぐる問題、教職員との関係をめぐる問題などの学校に係る状況で54766人（22、4%）が不登校となっている。また、150545人（61、4%）が本人に係る状況が要因となり不登校になっている。在籍児童生徒数に占める不登校生徒は2、6%という状況がある。

そこで本研究では、学級経営を通して学校を児童生徒の居場所にし、不登校・いじめを早期発見・未然防止出来るあたたかな人間関係及び学級づくりをすることを目的とし、Q-Uを用いて今日の児童生徒の学校生活上の課題を把握し、学級運営の改善か

ら、児童生徒の主体性を伸ばし、あたたかな学級づくりに活用するための実践について考察する。

Q-Uを用いた児童理解及び生徒指導に関して、実地研究を行ったS県の公立小学校が行った調査結果を基に、担当学年である第6学年1組における児童理解のアセスメントをQ-Uを用いて行うことで、児童理解を図り、児童にとってより良い場所となるための生徒指導について考察する。

2. 課題研究の定義

本研究において、望ましい児童生徒の主体性及び学級集団を定義し、その学級づくりの中で今日の課題を見だし克服を図るための学級経営について考察していく。また、実地研究を行ったS県の公立小学校で担当した学級のQ-Uの調査結果から、学級内の児童の友人関係・学習意欲・学級の雰囲気に対する承認得点及び非承認得点の分析を行い、日々の児童が感じているが教員が読み取れない点から児童理解を図り、生徒指導に活用する方法について考察を行う。

目指すべき児童の定義は、「**学校に居場所を作ることができ、学級集団において自己を発揮し、学校生活を充実させることが出来る児童**」と定義する。これは、新学習指導要領にて知識及び技能・思考力、判断力、表現力等・学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理し、生きる力を身につけた児童の育成が求められていることを鑑みて定義を行った。

目指すべき学級集団の定義は、「**児童全員が自他ともに認め合い、それぞれが主体的に活動し、協働的な人間関係を築くことができる、生き生きとした学級集団**」とする。これは、協働的な人間関係を構築することで、児童同士の人間関係の構築だけでなく、教員との関係の向上により対話を深めていく事

が出来るからである。また、あたたかな人間関係を構築することで、不登校の原因であるいじめを除く友人関係をめぐる問題を減らし、不登校児童を減らす事ができると考えるためだ。

児童理解に関して本研究では、Q-Uにおけるやる気のあるクラスをつくるためのアンケート及びいごちのよいクラスにするためのアンケートの児童の評価から、児童の学級生活上の満足度についてアセスメントすることとする。

また生徒指導に関して本研究では、Q-Uの調査結果から児童理解を行った上で、アンケートにおいて評価が低かった項目に焦点を置いて日々の児童に対する声かけや学級に対しての授業内外における働きかけをすることで、児童の日々の不満を解消することとする。

3、Q-Uの学級満足度尺度による学級集団の分析

Q-Uの学級満足度尺度による学級集団の状態は、「学級内の対人関係に関するルール」・「集団活動・生活をする際のルール」の2つからなるルールと、互いに構えのないふれあいのある本音の感情交流がある状態であるリレーションの2つが主な影響を及ぼす。本研究では、それぞれの児童の不安が解消し、学級生活満足群にプロットされるための児童理解及び生徒指導について考察する。また、学級内の児童の学級生活に対しての評価を学級集団全体として見ることが以下の学級集団の状態として出来る。

① 満足型の学級集団

満足型の学級集団は、児童の大多数が学級生活満足群にプロットされた学級集団であり、このような学級集団では学級内の決まり事が児童に浸透しており、学級内の友人関係も良好であることから、児童が主体的に活動をし、教員がそれをサポート出来るような学級の状態と考える。

全ての児童が学級生活満足群に属している満足型の学級であることが望ましいが、今日のQ-U調査からそのような学級は小学校で4%、中学校で4%であり、現実的には学級の約70%の児童が学級生活満足群に属している状態が望ましい学級集団といえる。したがって本研究では、学級の70%の児童

が学級生活満足群に属している満足型の学級を目指す。

② 管理型の学級集団

管理型の学級集団では、ルールは定着しているものの、子ども達の間で承認得点の差が大きくなっている。このような学級集団では、不満足群の児童が一定数存在しており、学級内で認められていると感じている児童とそうでない児童の差が大きくなってしまい、一部の児童にとってはいごちのよいクラスではあるが、その他の児童が居場所に感じにくくなってしまいうだろう。

③ なれあい型の学級集団

なれあい型の学級集団では、一見子ども達が元気で自由にのびのびとしている雰囲気のある学級に見えるが、学級内で決まり事があやふやになってしまい、中途半端になってしまうことから学級内でトラブルが起きやすくなってしまふ。そのため、学級内で悪口の言い合いやいやなことをされることも散見されてしまい、侵害行為認知群にぞくしている児童の居場所がよりなくなってしまい、次第に学校に来ることが嫌になってしまうことも考えられる。

④ 荒れ始め型の学級集団

学級内で、学級生活満足群の児童と、侵害行為認知群・学級生活不満足群の差が大きくなってしまい、学級生活満足群にぞくしている学級内で力があり、中心人物のような児童のテリトリーのような形になってしまい、引け目を感じる児童にとって教室にしばらく環境になってしまう。そのため、学級生活不満足群に属している児童がしだいに学級での生活に適応出来なくなり、不登校になってしまうことや、だんだんと学級内で力のある児童を中心とした学級に変化していつてしまう。

⑤ 崩壊型の学級集団

このような学級集団では、学級生活満足群に属している児童が極端に減ってしまっている。これは、学級内の秩序が崩壊してしまい、各々の児童が利己的に動いてしまい、児童間のトラブルから、学級生活を苦しく感じてしまう児童が増えてしまうことが考えられる。決まり事の欠如や児童の友人関係の欠如から、ルールとリレーションの両方の確立から、学

級づくりを始めないと、学級や学校に行きたくなくなる児童が増えてしまうだろう。

本研究では、①満足型の学級集団を目指すべき学級集団とする。本研究で目指す学級集団である「児童全員が自他ともに認め合い、それぞれが主体的に活動し、協働的な人間関係を築くことができる、生き生きとした学級集団」は、Q-Uの学級満足度尺度において学級集団に属する児童の約70%が学級生活満足度群にプロットされており、また学級内のルールが80%確立されている満足型の学級集団である。本研究では、学級の約70%の児童が学級生活満足群に属している状態が望ましい学級集団とし、また学級生活不満足群、侵害行為認知群、非承認群に属している児童のQ-Uの調査結果の分析と日々の観察から、児童がどのような点で学級に対して評価が悪いのか、児童が学級生活に満足できるための生徒指導について実践および考察をしていく。

4、方法

(1) 対象学級

S県の公立小学校第6学年の1学級34名。

(2) 実践期間と実践者の立場

2023年4月から2024年1月現在で、同学級の実地研究としての補助教員及び1日担任として関わった。

(3) 手続き

実地研究において日々の授業補助や授業外の児童と交流に参加する事を通して児童理解を図る中で、Q-Uの調査結果を分析することで学級集団の分析や、個々の児童の様子と分析を参照することを通して児童理解や生徒指導に活用する。

本研究で活用するQ-Uに関しては2023年5月に行われたQ-Uを用いて、学級開き後1ヶ月経ち、運動会後に行われた。コロナウイルスによる運動会の時期変更の影響があり、学校行事後にQ-Uが実施されたのは久々である事や、行事を通して学級経営をした上での実施であることから、異なったタイミングで調査を実施した場合とでは調査結果が異なる場合があることを注意する。

4、Q-Uの調査結果の分析

実地研究を行ったS県の公立小学校の担当学年で

ある第6学年の1学級の調査結果の分析から、児童の学校生活上で感じているいごちや学習に対するやる気について考察を行う。

まず、学級集団の状態であるが、学級の大多数が学級生活満足群に属している満足型の学級集団であった。満足型の学級集団では、「学級内にルールが内在化しており、その中で子ども達全体の承認得点が高くなっている。主体的に生き生きと活動出来ている状態で、教員がいない時でも子ども達である程度活動することが出来る。また、親和的な人間関係があるので、子ども達の関わり合い、発言も積極的で、活気があり、笑が多い学級である。」といった特徴があるが、学級内では、児童の大多数が友人関係が多く、教員との関係が友好、また児童間でルールが内在化しており、児童会を中心とした学級活動など児童が主体となって活動を行う、それを元に反省を児童で行い、次の児童会に活かすだけでなく、例えば「クラスの絆を深める」といったテーマを設定した際に、テーマに沿った内容のレクを決定、児童が時間を有効活用して準備や実施をすることで、児童主体の活動を教員がサポートするような形で活動を行うことが出来ていた。

以上のことから、学級集団として目指すべき集団である「児童全員が自他ともに認め合い、それぞれが主体的に活動し、協働的な人間関係を築くことができる、生き生きとした学級集団」はおおむね満たしていると考えられる。

5、Q-Uを活用した児童理解

次に、Q-Uを活用し児童個人に焦点を当て、児童が学校生活上で感じている学級内でのいごちや学習に対するやる気について分析を行い、児童理解を図り、また児童の学校生活上の不安や不自由を解消する生徒指導について考察を行う。

まず学級集団についての分析だが、全34名の学級に対してQ-Uの調査結果から、学校生活満足群が82%、非承認群が3%、侵害行為認知群が12%、不満足群が3%となっている。やる気のあるクラスをつくるためのアンケートの調査において、「クラスの人は声をかけたり親切にしてくれてい

る」という項目に対して肯定的な評価をしたのが学級集団のうち100%、「クラスにいい人だな、すごいと思う友達がいる」という項目に対しては97、1%が肯定的、「クラスの人から好かれ、仲間だと思われている」という項目に対して88、2%が肯定的な評価が見られた。以上のことから、児童一人一人の学級に対する仲間意識や友達への信頼が十分にあると考える。また、「授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き」という項目に対しての評価では、76、5%の児童が肯定的な評価をしている一方で、苦手・嫌いという評価をしている児童が23、5%いることが分かった。

以上のアンケート調査から、学級集団としては児童が学級の中で認め合い、おおむね満足した学級と成立している満足型の学級集団であり、その中で学級の中にいると実感出来ている様態である事が分かった。河村茂雄によると、すべての児童が学級生活満足群に属している「理想」の学級集団と言える学級集団が小学校で4%、中学校で4%であり、現実的には学級の約70%の児童が学級生活満足群に属している状態が望ましい学級集団といえる。従って、本学級は、理想の学級集団になっていると考える。また、その中で個人に焦点を当てた際に、侵害行為認知群にプロットされている児童や学校生活満足群にプロットされているが学校生活上で少し不満に感じている部分分が分かった。まず、承認得点について、

- ・クラスの人から認められることがある
- ・クラス人は協力したり応援したりしてくれる

と言った項目に低い得点をつけている児童がいた。同様の項目として児童Aについての分析から、児童理解及び生徒指導について考察を行う。

6、児童理解及び生徒指導の実践

今回の学級では、34名の学級のうち、82%（28名）の児童が学級生活満足群に属していた。その中で、非承認群が1名、侵害行為認知群が4名、不満足群が1名存在している。

また実践としては、非承認群、侵害行為認知群、不満足群に焦点を置きつつ、当該児童の児童理解及び生徒指導を中心とした学級全体に対しての指導も

かねて実践及び考察を行う。

① 侵害行為認知群に属している児童の児童理解及び生徒指導

実践1、気持ちを分かってくれる友人がいない、という児童に対しての児童理解

侵害行為認知群にプロットされている児童Aは承認得点における、

- ・気持ちをわかってくれる人がいる

や、非承認得点一人ぼっちであることがあるといった孤独感を感じている児童がいることが分かった。

児童Aに対しての児童理解について、児童Aは受験を控えており、塾での勉強を通した保護者と関係から不安を感じており、そのことに対して相談できる友人が同様に受験勉強をしている数人しかいないと言った環境にいた。また、児童Aは、タブレットを使った活動が得意で、サポートをすることが得意であった。

・本児童に対する生徒指導の方針

学級における児童Aの有用感や自己肯定感を高める活動として、児童が発表をする活動を多く設ける授業内で、タブレットを用いてパワーポイントを作成したり、発表用の原稿を作成したりすると言った活動で児童Aが活躍できる場を設定することで、他の児童が活躍を認めることを多く設けた。また、児童Aは算数が得意ということから、授業内で児童が「ミニ先生」として苦手な児童のアドバイスをしたり丸付けをする授業を行い、他の得意な児童と共にお願いすることで、児童Aに対して他の児童から教えてもらうために名前を呼ぶ機会が増え、次第に授業内外で、児童Aが頼りにされることが多くなった。受験勉強についても、休み時間に受験勉強をする他の児童と共にいる時に声かけをすることで不安感を取り払うといった活動を積極的に行った。

実践2、いやなことを言われる、暴力を振るわれることからクラスにいたくないと感じている児童に対しての児童理解

次に児童Bについて、Q-Uの分析からの児童理解及び生徒指導について考察を行う。

児童Bは、承認得点における、

- ・つらい思いをしている（言葉・暴力）

・クラスにいたくないと思うことがある
といった他の児童との関係から学級内で不自由を感じている。また、普段の学級内の様子の観察から、児童Bが学級のためにやってくれていることに対して学級が気づかないといった様子が見られるほか、他の児童がお節介だと感じてしまった結果小競り合いのような形で悪口の言い合いになってしまう、やられたらやり返すという形で軽いたたき合いをしてしまうというような他の児童との関係が見られた。またその状況を打破しようと教員に報告する様子が何度か見受けられた。

・本児童に対する生徒指導の方針

本児童についてQ-Uの調査及び分析後に観察を行ったところ、友人とのコミュニケーションにおいて、児童Bの学級内での貢献が認知されていなく、学級内で少々お節介のような扱いになってしまっていることが見受けられた。しかし、係活動においてもレクをして学級を楽しませる係を率先して行ったり、日々の配り物などにおいても教員に何かする事は無いかと声をかけたりと言った様子が見られた。

そのため、児童Bを中心とした周りに気を配れる児童に対して学級全体で気づき、認め、褒めるといった活動をホームルームで共有することで、自己肯定感や自己有用感を伸ばす取り組みを学級で行った。友人とのトラブルに関しては、学級内の観察から、小競り合いをした際に、その場で両者の話を聞くことを行い、またそれまでの様子について観察を行う事で、トラブルの原因について把握、また児童と共有し、片方に非があるのか、また仲直りをする事を通して、話し合いによるコミュニケーションの改善を中心に行った。

友人関係については、児童間でお互いに主張をぶつけ合うといった様子が見られ、児童Bのみが嫌な思いをするといった様子は減少した。しかし、その中でお互いで軽いたたき合いが始まるといった様子は減少したものの見られるため、引き続き友人関係におけるコミュニケーションの改善を図っていく。

実践3、休み時間に一人ぼっちでいることがあり、孤独感を少し感じている児童に対しての児童理解

児童Cは、普段休み時間に友達とサッカーをした

り、一見友達（主に男子）との関係が良好に見えるが、一方で教室で絵を描いたり折り紙をしたりしている姿が見える。その中でのQ-Uの調査結果から、

・休み時間などに、一人ぼっちでいることがある
という項目で比較的高い得点で評価しており、また
・嫌なことを言われたり、からかわれたりしてつらい

という項目で比較的高い評価をしている事が分かった。しかし、学校生活意欲プロフィールではどの項目も高い評価をしており、友人関係に関しても良好な関係を築けているという自己評価がなされている。これらの調査結果と担任の観察からの児童理解として、もともとインドアな児童であり、友達と校庭でサッカーをしたりすることも好きな一方で、教室で一人で何かをすることも好きな児童である事が分かった。

・本児童に対する生徒指導の方針

本児童に対する生徒指導の方針として、外で友達と元気に遊ぶ時と、教室で折り紙や絵を描いたり本を読んだりして遊ぶ時の姿を注視し、例えば教室で遊んでいる際に同様に遊んでいる児童との交流を図ったり、教員自身で児童Cに対して話しかけて共通の話題で話すことで孤独感の解消を図っていく。

また、Q-Uの項目である「嫌なことを言われたり、からかわれたりしてつらい」という侵害感に対する解消は、本児童だけでなく、学級の複数人が侵害感を感じていることがQ-Uの調査から分かった。これらのことから、本児童に対して友達関係の様子を注視していくことを中心に、学級全体の友達間の交流で悪口や強い口調などが散見された際に適宜指導していく事、また学級全体でその課題を共有し、児童主体で克服のためのルールの設定をする事を通してリレーションの改善を図っていく。

実践4、学級内では友達から信頼されているものの、指呼肯定感が低い児童の児童理解

児童Dは、授業内外における観察からは、他の友達から見ると勉強が得意で、主に男子の友達との友人関係も良好である。また、性格は真面目で、学級のアンケートにおいても頭が良い児童でも上位に上が

り、社会が好きで自主学習ノートも好きな勉強についていても調べ学習をしており、好奇心についてもとても高い。

しかしQ-Uの調査結果では、承認得点において

- ・クラスの人から認められることがある
- ・クラスの人が励ましてくれることがある
- ・気持ちを分かってくれる人がいる
- ・自分が発表する時ひやかされたりしない

と言う項目で満足群の児童と比較すると少し低く、被侵害得点では、全ての項目で少し侵害感を感じていることが分かった。本児童に関しては、学級内ではすこしおとなしく、リーダー的な存在というよりは、男子グループの中では真面目で勉強ができるタイプであった。その中で本学級では受験勉強をする児童が多く、学習面において同様に成績が良い児童が複数人いることや、活発で背が高く、学級では中心人物である児童と比較すると劣等感を感じている場合があると考えられる。

・本児童に対する生徒指導の方針

本児童に対する生徒指導の方針としては、自己肯定感の向上のための生徒指導であると考えられる。「学び合ってこそ子どもは育つ—子どもが学びの主人公になるとき」において渡辺恵津子は、自己肯定感の形成過程として以上の項目を挙げている。

- ・自分の思いをあるがまま受け止めてもらえたとき、そのままの自分を受け止めてもらえたとき
- ・ 混乱やつまづきを発表・表現できたとき、先生に取り上げられたり、友だちの支持を受けたりしたとき
- ・ 討論の中での自分の認識の変化を自覚したとき、そして「腑に落ちる納得」の瞬間。討論に参加できた喜び、意見がもてた喜び、分かった喜びなど納得までの過程での各々の瞬間が自己発見につながる
- ・ 自分の「勉強したい」「わかりたい」という学びへの思いが「発酵」して行動に移し始めたとき。友だちの支持や励まし、友だち発見が起点になっている
- ・ 自分の考えを発案したり、「学びのバイパス」を拓いたりすることで喜びを感じる時。算数の新しい

学びに気づくと、それがさらに自分の意欲を高めていくことになり、「まんざらでもない自分」がまた膨らんでいく

- ・ 学びの中で新しい問いが生まれ、それを自分で解決し新しい学びが生まれたとき

本児童のQ-Uの調査結果から自己肯定感を高める生徒指導の実践に適する自己肯定感の形成過程は、混乱やつまづきを発表・表現できたとき、先生に取り上げられたり、友だちの支持を受けたりしたときを活用した指導が挙げられる。渡辺は、この指導の重点として、授業課題を子どもたちの生活と結びつけ、子どもたちが課題解決に身を乗り出すようなものを子どもたちとともに発見しつくり出すことを挙げている。本児童はQ-Uの調査結果において、「自分が発表する時ひやかされたりしない」という項目で比較的低い得点をしていることや、学級を観察した際に、活発でにぎやかであり、主体性がある学級である一方、発表中にすこし騒がしく、発表が苦手な児童にとっては苦になってしまう場合も考えられるため、学級全体に対しての指導やルール確立をしていくことを中心に学級経営を行っていく。また授業外においては、友人関係を通じた自分の見つけ直しで、人それぞれ得意不得意、好き嫌いがあること、またその中で個々人が自分自身を認められるような活動を学級活動や道徳を通して行っていく。

② 非承認群に属している児童の児童理解及び生徒指導

実践5、学級において友達関係において認められたることや分かってくれる友達が少なく、学級を不満足に感じている児童の児童理解

本児童Eは、Q-Uの調査結果において、

- ・クラスの人から認められることがある
- ・気持ちを分かってくれる人がいる
- ・クラスの人とは協力したり応援してくれる

の項目において最低の評価をしていた。しかし、学級での様子を観察すると、友達と仲良く校庭でサッカーをしたり、授業内の活動でも友達と協力して活発な活動をしたりしている様子が見られている。

担任の観察や児童理解について、本児童は以前に

不登校になった過去があり、学級開き当初はまだ暗かったが、次第に明るくなったとされる。また、その中で運動会がありグループで行う種目を通して活躍の様子から、学級内で居場所を得られるようになったことで今年度は休みも少なく、また授業内外で本児童の方から話しかけてくるということをとても多い。しかし、自己肯定感が低く、内心は少し怖さが残っているためか、担任の教諭からきつく指導された際には深く落ち込んでしまうといった様子も見られた。

・本児童に対する生徒指導の方針

本児童に対する生徒指導の方針として、本人にとって大きな壁に当たり、自己解決が難しいような状況になった時に助けてくれる友達を得ることだと考える。児童理解の際にも挙げた、きつく指導されたり怒られたりすると、抱え込んでしまったり塞ぎ込んでしまったりすることがある。その際に声をかけ、一緒に解決し克服を図る事が出来る友達を作る事や増やすことを中心にサポートを行う。そのための方策として、できるだけ多く児童が主体的となって発表する活動を学習において取り入れること、児童会において役割を持たせること、そしてそれを友達と共に協力して行うことで1人では解決出来ないような課題を解決して達成感だけでなく、協力してくれる友達や、その中で分かってくれる友達がいると実感出来るような取り組みを行っていく。

③ 学校生活不満足群に属している児童の児童理解及び生徒指導

実践6、学校生活意欲が低い、学習面において優れており、自己評価が低い児童の児童理解

本児童は、学級生活において友達関係及び学習意欲が学級全体と比較した際に低く、自己肯定感が低いと考えられる児童である。

Q-Uの調査結果では、友達関係における

- ・クラスの人から好かれ、仲間だと思われているという項目では高評価がされている。また、学習意欲に関しての評価では、
- ・授業中に質問に答えたり発言したりするのは好き
- ・いろいろな活動に取り組もうとする人がたくさんいる

という項目で高評価をしている。これらのことから、友達関係において、仲間から認められていると実感出来、学習においても観察から、受験勉強を活かし学習において苦手な児童にアドバイスをしたり、調べ学習で発表をする際にとりまとめする時に頼られたりする姿が見られた。

・本児童に対する生徒指導の方針

本児童は、承認得点及び非承認得点の両方で2点がほとんどであり極端な点を付けないといった場合も考えられるが、本児童の学級での立場としては同じく受験勉強をしている児童Aと仲が良い様子が見られた。これは、同じ受験勉強を頑張っているといった共通点や、性格なども似たものがあることが要因だと考えられる。児童Aの生徒指導と兼ねての指導として、同じ境遇として気持ちを分かり合える仲間である児童のために互いに孤立感をなくす取り組みを行っていく。また、受験勉強を通し競争の中で他人と比較する事で自己肯定感が揺らいでしまっている場合の指導の方針として、学校での授業では、理科の実験や社会の歴史の授業において歴史上の人物になりきってその人物について紹介するような活動をするなど、リフレッシュできるような授業づくりを行っていく。

7、Q-Uの調査結果の結果を基に児童理解及び生徒指導を行った結果とその考察

本学級のQ-Uの調査結果の分析及びそれを活用した生徒指導を行った結果として、まず本学級は学級生活満足群が全国の学級と比較しても非常に高いこと、また、学級始めから1ヶ月経過した後に運動会があり絆が深められたのも要因として、学級全体としても満足型の学級としてもかなり成熟した学級である事が分かった。これは本学級だけでなく、学校全体として落ち着きがあり、また地域性もあるのではないかと考える。従って学級経営の際に活用するQ-Uの結果は地域、学校によってかなり異なる場合がある。その際に、ルールの確立から学級内で不自由を感じてしまっている児童を減らすための学級経営のためのツールとして活用したり、学級内のリレーションの確立をすることで、友達関係を重視した学級づくりを図るためのツールとして利用した

りすることに効果的であると感じた。

児童理解については、日々の観察とQ-Uの評価が異なることが今回の実践から分かった。とくに、学級での様子では、他の児童と友好的関係を築き学習面についても優秀である児童が、Q-Uの調査では友人関係においていやなことをされているという評価をしており、些細な悪ふざけに心を痛めていることが学級全体の分析から分かった。他の児童と比較した際に自己肯定感が低く学習面で低い評価をしていることなどが考えられるため、学級全体に対しての生徒指導に関して、個人としての成長から自己肯定感を高めていくこと、いじめとはいかないうちのちょっとした悪口、強い口調が相手を傷つけていることを指導していく必要があると改めて感じた。また、このような指導は、学級全体がある程度友人関係が構築されていて、学級内の決まりことも共有されているが、細かい決まり事はあまりなく、次第に学級内で児童と課題を発見し解決していく過程で作っていくという学級経営の進め方が好ましいだろう。生徒指導から生徒指導の実践に進めていく際には、学級の状態によって指導の方針を変えていく必要があると考える。本学級は第5学年からの持ち上がりで、昨年と同様の学級集団であること、また担任の教員も昨年までに担任をしていることから、児童と担任の信頼関係もある程度構築されているという背景がある。従って、学級が再編成された場合や、初めて受け持つ学級の場合には、児童が学級生活について不安定で、学級づくりを初めから行わなければならないため、友人関係の構築や、学級内の決まり事を作っていく、次第に各児童が学級づくりに対してどのように感じているのか、学級生活にいかにか満足しているかをQ-Uを使って分析して、1年間を通した学級づくり、学級経営の方針決めのツールとして活用していくことが出来ると考える。

8、まとめ

本研究では、Q-Uを活用した学級経営の1つとして、学級内の児童が学級生活上の友達関係、学習意欲の評価に焦点を置き、各々の児童が満足した学級生活を送るための児童理解に活用し、生徒指導の

実践から考察を行った。本学級は学級集団として全国の学級と比較して極めて学級生活満足群が多く、個人に焦点を当てた研究であったが、実際には河村も述べているように、このような学級はむしろまれで、学級生活不満足群や侵害行為認知群、非承認群も学級内で一定数存在し、いわゆるルールやリレーションの確立がなされていない学級もあるなかで、1年かけて学級を成熟したものにしていく必要がある。

また、本研究は5月に行われた第1回目の調査であり、それをもとにした分析や生徒指導の実践であった。これらの実践の振り返り及び生徒指導の改善に向けて本来1月から2月にかけての第2回調査を含めて児童の変化を見ていく必要がある。そのため、1年間を通した実践や前年度を踏まえた学級始めの学級づくりの方針決めなどについては今後の実践として取り組んでいく。

今後の課題としては、Q-Uの調査をいかに活用していくか、また調査をしてそのみで終わってしまう場合もあるため、研修を通した学級全体、また学校全体としての取り組みとして推進することが考えられる。Q-Uの調査の取り組みに有無は学校によって様々であるが、Q-Uの調査項目に関しては普段の児童理解や生徒指導の方針のための視点として活用することが出来る。そのため、Q-Uの実施の有無に限らず児童理解や生徒指導のために活用していきたい。

研究協力

S 県の公立小学校第 6 学年 M 教諭

S 県の公立小学校 S 校長

参考文献

渡辺恵津子「生きること学ぶこと—いま、思春期へ旅

立ちのとき」(『生活教育』1993 年)

河村茂雄 藤村一夫 粕谷貴志 武蔵由佳 NPO 日本教育カウンセラー協会「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド」(『図書文化』2004 年)